

外国人散在地域での「時間と場の共有」のしかけ —合宿研修を事例として—

松岡 洋子 (岩手大学)

1. 外国人散在地域岩手の状況

平成 26 年の岩手県教育委員会の調査によると、県内に日本語指導が必要な児童生徒は、県内の公立小中学校に 47 名で、その過半数が日本籍である (図参照)。在籍校は県内 23 校で、そのうち複数の当該児童生徒が在籍する学校は 8 校 (約 35%) である。

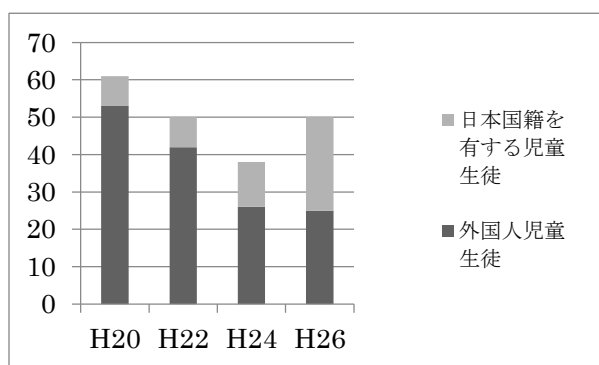


図 日本語指導が必要な外国人児童生徒数 (岩手)

岩手で課題となっていることは、外国につながる子どもあるいは日本語指導が必要な子どもの存在や、その指導・支援の必要性、方法について無知・無関心だということである。これに対し、教育委員会や子どもの在籍校、外部支援者が多様な支援を行っている。しかし、子ども自身も保護者や指導担当者などは、地理的な悪条件もあって孤立しがちであり、支援が行き届きにくい。

2. 時間と場の共有のためのしかけ

2. 1. 合宿の目的

前述の課題解決の一助として、子どもたちが時間と場を共有するために、合宿研修を実施することにした。この合宿の目的は、1) 個別の状況に合わせて日本語・教科学習の支援を行い、個々の子どもの学習の疑問や躓きを解決する、2) 子どもの孤立感を緩和する、という 2 点である。また、ともに参加する保護者にとっては、1) 家庭を離れて子どもの

様子を知り、子どもの成長や課題を客観的に捉える、2) 保護者間や支援者と情報交換することによって、不安を解消するとともに、子どもに必要な家庭での支援方法を知る、という 2 点が目的である。

2. 2. 合宿研修の概要

合宿の実施時期、場所、参加者棟は以下の表の通りである。実施経費は年によって異なり、中島国際交流財団、トヨタ財団といった民間財団からの助成金を獲得したほか、科学研究費補助金、岩手県国際交流協会、岩手大学からの経費を活用して実施してきた。参加者は岩手県内在住の外国につながる子どもたちとその保護者、学習支援者としての留学生、日本人学生、民間支援者、大学教員である。2012 年からは岩手に加え、青森、宮城、福島からも参加している。

表 合宿研修実施状況

時期	場所	参加者			
		子ども	学生	支援者	保護者
2007/11	滝沢村	11	8	5	7
2008/01	一関市	6	8	2	6
2008/11	二戸市	14	17	8	2
2009/01	滝沢村	12	9	4	4
2009/11	滝沢村	13	18	8	1
2011/02	滝沢村	20	10	8	3
2012/02	滝沢村	19	13	11	3
2013/01	滝沢村	21	12	13	4
2014/01	滝沢村	18	11	10	5
2015/01	滝沢市	27	30	11	10
2016/01	滝沢市	31	32	10	7

合宿は岩手県内の宿泊研修施設において 1泊 2 日で行われる。初日は、個別学習を中心

に、交流ゲームやスポーツ、雪あそびなどを取り入れ、参加者の緊張感を和らげる。2日目は、個別学習に加え、絵本の読み聞かせなど全員参加の活動も行う。個別学習の時間に保護者や支援者は子どもの教育方法や進路について情報交換を行う。

3. 時間と場の共有のしかけの意義と課題

3. 1. 合宿の効果・意義

この合宿研修の特徴は、1) 日頃、接触機会が少ない外国につながる子どもたちが地域を越えて時間と場所を共有する、2) 大学生(留学生、日本人学生)が個別に学習支援を行う、3) 保護者、学習支援者が地域を越えて情報交換すること、という3点である。これは、日頃接触が困難な子どもたちや保護者、支援者が時間と場を共有することによって、外国人散在地域の悩みに対応するものである。

合宿の効果を検証するため、参加者の自由記述によるアンケートをキーワード化し、分析した。その結果、子どもにとっては、1) 集中学習形式による学習課題解決、2) 参加者の相互刺激によるやる気の喚起、3) 孤立感の緩和、4) 大学生や先輩格の子どもとの接触によるロールモデルの獲得と将来像形成、5) 保護者、支援者の情報交換による教育環境改善、などの効果や意義が認められた。

一方、学習支援や交流相手となる大学生からは、1) 年齢や立場の近い存在として子どもを支援する意義(ロールモデルとしての役割を含む)、2) 言語能力と学習能力の相関に対する気づきとその支援、3) 学習支援の重要性と困難さに対する認識、4) 異文化接触の楽しさ、困難さへの気づき、などが報告された。また、保護者からは、1) 子どもの成長の確認、2) 母語での意思疎通の重要性の認識、3) 日本語学習の重要性の再認識、4) 安心感、などが挙げられた。支援者からは、1) 家庭環境(孤立化)の理解、2) ロールモデルの存在の重要性、3) 支援者・保護者も含めた参加者間の情報交換の有効性、4)

継続性の重要性、5) 子どもの成長の確認の機会、といった項目が見られた。

以上のことから、この合宿研修が、外国人散在地域の持つ課題に対して有効な機会として機能していると捉えることができる。

3. 2. 課題

この合宿研修の最大の課題は、支援が必要だと思われる子どもの保護者や学校に情報が届かないことである。岩手をはじめ東北地方は面積の広さ、公共交通機関の不便さなどが障壁となり、地域間の交流が少ない。教育委員会や学校との信頼関係の構築が求められる。また、スタッフや支援者の役割分担、経費獲得を含めた継続性の担保、などが課題である。

4. 大学による機会提供の意味

大学がこのような活動に関わる意義は、1) 学校、保護者等の信頼を得やすい、2) 大学生を支援者として提供できる、3) 実施経費の獲得が比較的容易である、という点である。しかし、最近、教員も学生の時間的にこのような活動に関わる余裕が少なくなっている。合宿では岩手大学だけでなく、他大学の学生の協力も得られるようになってきた。大学間の連携をこのような活動に活用すること、支援者と大学とがより連携して、時間と場の共有の仕組み作りに取り組むことが、今後の役割となってくると考えられる。

5. まとめ

わずか1泊2日の短い時間であるが、日本に来て一番楽しい時間を過ごしたと笑顔を見せたり、リピーター参加者としてリーダーシップを取ったり、帰路に就く際には別れがたく涙を見せたりと、実にさまざまな子どもたちの姿がある。日ごろの学習支援に加え、このような場と時間の共有の機会を今後とも継続していく意義は大きい。

付記：この合宿研修は「いわて多文化子どもの学習支援連絡協議会」の事業の一環である。